

巻 頭 言

日本は現在、超高齢化社会を迎えています。人口動態統計の速報値では、2021年の年間死亡者数は145万2289人の戦後最多数となり、一方で出生数は、84万2807人で1899年の統計開始以後最少となりました。高齢化に伴い死亡者は増え続けており、少子化とともにケアの担い手が減少するといった状況に陥っています。2025年には団塊の世代がすべて後期高齢者に達する頃を見越して、看取りの場所の確保や終末期医療の在り方が喫緊の課題となっています。しかし、看取りの課題は医療や法制度だけではなく、人々の生と死のとらえ方や、人々が生きてきた地域や暮らしに対する考え方、いわば文化の中で議論されるべきものだともいえます。現在社会のありようを、ネガティブな側面だけでとらえるのではなく、これまでの私たちの認識を見直し、本来あるべき幸福な療養や看取りの姿とはどのようなものなのかを考え直す時が来ていると考えます。

また、2020年に始まった新型コロナウイルス感染症は、私たちの日常を奪い、人として当たり前許されるはずの、愛する家族との暮らしや、人との交流の機会を容赦なく奪いました。感染症の影響下では、離れて暮らしている家族同士も自由に会えなくなり、医療機関や施設では、看取りの場面でも面会を制限せざるを得ないといった現実直面しています。そのような中だからこそ、地域の中で望む形で人生を終えること、看取ること、サポートすることの価値を再認識するとともに、専門職の援助だけにこだわらない住民同士の支え合いから生まれる旅立ちの温かさを知りたいと思いました。

2021年度の北海道医療大学看護福祉学部学会第17回学術大会では、「市民とともに育む看取りの文化」をメインテーマに、さまざまな立場の方々から、看取りについてのお考えを話していただきました。基調講演では、「写真が語る、いのちのバトンリレー～在宅看取りの現場からあたたかい死を考える」と題して、フォトジャーナリストの國森康弘さんから講演をいただきました。國森さんは、戦場や被災地を数多く取材し写真に収めていたジャーナリストですが、悲惨な死を目の当たりにしてきたある時、「もっと、幸せな、温かい死があるはず。それを撮りたい」と考えて、滋賀県東近江市を皮切りに、在宅看取りの場面を撮り始めたそうです。講演では、医療者の目線ではなく、ファインダー越しに見つめる市民・ジャーナリストの目線で、たくさんのドラマを写真と語りで見せてくださいました。

シンポジウムでは、さまざまな立場の方にお集まりいただき、「市民と多職種で取り組む看取りの文化の醸成」をテーマに、看取りの実際について話していただきました。介護施設の管理者を務める福祉職、訪問看護ステーションの管理者、死をフランクに話せる看取りカフェの経営者、在宅看取りが近い療養者にリハビリテーションを行っている理学療法士などから、多彩な事例の紹介がありました。

多死社会の進行とともに、終わりの見えない新型コロナウイルス感染症、度重なる災害、そして対岸の火事とは思えないウクライナ紛争…、課題が山積している現代ですが、私たちは常に、人々の幸せと平穏のために、力を合わせていきたいと思えます。

第17回学術大会 大会長 竹生 礼子